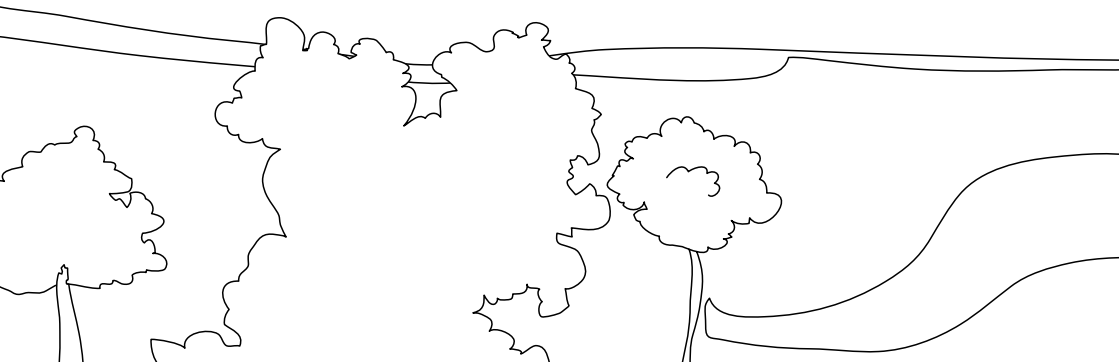
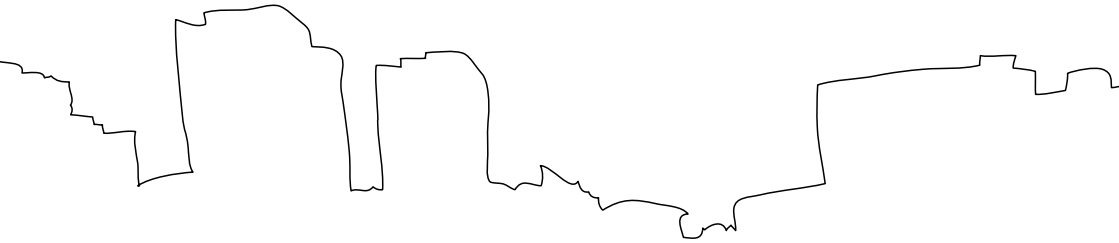
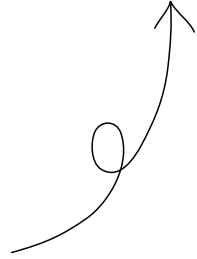




建築家の本
まちへ
都市・景観を考える



巻頭言

はじめに	6
藤本昌也 美しいまちづくりの実現に向けて	10
土田 旭 タウン・アーキテクト	19

〈都市デザイン〉の素養をもち、地域を根拠に活動する。建築家の登場を期待する
 まちへハミ出し、社会の「論理」を理解し
 地域から信頼される建築家たれ

大会アピール	26
川勝平太／美の文明を創る	28
まち、生活空間・環境、都市景観とこれからの建築のあり方	36
藤本昌也 〈部分〉から〈全体〉へ	38
柴田いづみ まちづくりの起爆剤	44
討議 進行役…内藤 廣	50

住まい、まちづくりに関する
 専門家集団にいま、何が問われているか
 個の総体が、まちをつくる

Session2	72
建築とまちをつくる制度と手法	72
青木 仁 まちを歪めてきた病理	74
山本和彦 民間からのまちづくり	80
安井 昇 歴史的市街地復興	86
討議 進行役…南條洋雄	90

建築とまち(都市)をつくる
 制度と手法に関するメモ

景観デザインとしての六本木ヒルズ
 集団規定適合を果たした
 京町家の仕様と今後の課題

Session3	106
今日の建築、まちをめぐる課題と建築家の役割	106
甲斐徹郎 「関係」の価値化	108
野沢正光 「減築」ということ	114
隈 研吾 建築家の孤独	119
討議 進行役…倉田直道	124

第三パラダイムとしての「環境共生」

旧東ドイツにおける「負の遺産」再生
 成熟社会における
 委員会システムと闘う

Session4	142
美しいまちづくり 建築家に問う	142
岸田里佳子 全国どこでも活用	144
土田 旭 「建築家心」がまちをつくる	150
討議 進行役…南條洋雄	157

景観線三法について

都市計画法、建築基準法の
 問題について

建築家はまちを美しくできるか	自ら大規模開発に飛びこみ「開発」の有り様を変えよ	南條洋雄	178
「関係性」回復のためのデザイン	時代の転換点を見据え、日本型まちづくりシステムを再評価	青木 仁	184
建築の個体距離と都市景観	オープン・スペースをつくる都市システムと十字式設計法でまちの緑被率を上げる	仙田 満	193
景観法というリターン・マッチのゴング	自己批判せよ、そして閉じた世界観から抜け出せ	内藤 廣	197
QとIおいしい建築、おいしいまち	市民の期待を超えるサービスを提供し、本当のプロになれ	野沢正光	201
糸玉づくり	「知る」「つくる」は「くむ」の視点から協働のプロセスをかたちに	與謝野久	204
美しいまちづくりと保存再生	歴史的まちなみの保存を、未来のまちづくりにつなぐ	鯨坂 徹	211
景観法活用にもつれた全国の動き	着実に増える景観行政団体、ソフト面の取り組みに期待	岸田里佳子	215
リアリティのあるまちづくり	場所の経済に、建築の経済を接続する「デザイン」対「経済」の二項対立解消へ	隈 研吾	221
まちの処方箋	現代人の豊かさづくりのジレンマを解く	甲斐徹郎	224
継承と革新のルールづくり	新たな都市景観美を追求する余地を	山本和彦	231
タウン・ドクターとしての建築家	良い景観は資産、まちの健康管理も大切	山下昌彦	236
ローカル・ルールと建築家の仕事	まちを説明し、まちを評価する	永松 暁	243
地域力による防犯・防災のまち	ソフト・ハード両面から人命を守る	柴田いづみ	249
コミュニティ・アーキテクトという職能	市民として参加し、専門家としての活動へつなぐ	久間常生	256
景観の将来ビジョンを考える	市民の共通認識を生み、景観形成の具体戦略を練る	小林正美	262
地域の個性を見極め個別解を選択	次世代の合意形成がまちをつくる	倉田直道	272
まちを「整える」六つの方法	自分のまちは自分でつくる気概を	柴田知彦	277
著者等のプロフィール			286
あとがき			288

付録

292	美しい国づくり政策大綱
307	景観法
351	JIAまちづくり憲章

はじめに

既に一定の質に達した住空間を私たちの社会は手に入れ、また、手に入れようとしている。しかし、このまちの生活空間の貧しさはどうしたことだろう。

「土地本位」の特異な時代

最大の原因は、先の戦争で焦土に化したことにある。歴史も蓄積もそして文化までもがすべて灰になり、崩壊した。そのことを時に思い出すことは無意味ではないだろう。ゼロベースからの再出発ゆえに優先することがあった。焼け跡から自分たちの住まいを再び手に入れ、そのレベルを一步ずつ向上させなければならなかった。社会の諸施設も同じである。多くの時間と生み出す富の大半はそこに注ぎ込まれた。その過程に合わせるかのように都市化が爆発的に進み、いわゆる土地本位制と呼ばれた異常な状況が発生し、二十世紀の後半、半世紀の長きにわたり続いた。いかなる投資よりも土地の所有が生み出す値上がり益が大きく、その状況下で私たちの社会は、土地や住宅資産を守り育てること、地域の生活や評価向上へ目を向けた投資、自分の住むまちを自らの手でつくる気概が失われてしまった。そうした努力を無意味にする

ほどに土地本位制は貫徹していたといえる。かくして、人々の意識からまちが消え、敷地の内側、自己の生活実現のみに特化してしまった。それをトレースし、敷地の内側に自閉し、設計者の自己実現の結晶のようなものに矮小化^{わいしょうか}してしまったのが戦後長く続いた建築界の姿……といっってはいい過ぎだろうか。長い歴史の中で一時的とはいえ、私たちは特異な時代を生きたことになる。

まちは身近な生活空間

「都市」ではなく「まち」と呼ぶのには理由がある。その生成、その行く末に参加する主体性確保の問題である。今日の都市は、その巨大さ、漠然さゆえに、私たち自身を客体としてしまう。決して主体とすることなく、その結果、観念の世界で都市とつきあうこととなってしまった。一方、まち……私たちの身近な生活空間、地域社会は、少なくともその総体を把握できる。個がつくる空間の集積、個がなし得た人生の集積の総体がまちの実態であり、個人であれ、法人であれ、ヒトの個別の事業活動、創意と投資努力がまちをつくっている。そして、そのまちの有り様^{ようよう}は私たちの日々の快適さ、安全、満足など、生活の質と深くかわっている。にもかかわらず、長らくその存在、その関係を自分が参加しつくる対象としてすっかり忘れてしまっていた。戦後ずっと自分の内

側の生活実現に追われていたのだから無理もない。内側の充実あるいは行き詰まりは人々の目を外へ向けさせる。今日、幸せを求めようとすれば、私たちの意識は内向きから少し外へ向けて変わらなければならぬ。そして変わろうとしている。いま、誰しもがまちを語る時代となった。建築もまちとともにあるうとしている。

敷地から出でてまちへ

成長に従って人が内側から外に踏み出すように、これからの社会は、地域との関係を築き、他者と幸せを共有して生きる時代になる。孤立しては、これ以上の生活環境の発展はおろか、その維持すら望めないのではないだろうか。そこに、まちづくりの本質がある。敷地から出でてまちへ……である。

この『建築家の本まちへ』には、まちへ向けて変わろうとする建築家の意識が結実している。本書の第一部をなすプレゼンテーションと討論は、JIA「建築家大会2004東京」の記録である。建築分野に加え、都市や開発など関連分野の方々の参加を得た集中シンポジウム（セッション1〜3）は五時間に及び、会場は人であふれ、予想をはるかに超えた熱気に包まれた。大会式典（セッション4）では、社会に広く異分野の方々の参加を得

て、活発な討論がなされた。これらの討論を通じて、まちへ向かう建築の今日を解き明かし、示唆に富む論点や課題が数多く提供された。しかしながら、シンポジウムの性格上、それらは提示されるに留まっている。そこで、パネリストや大会の幹事の書き下ろしによって、各セッションの論点、課題を掘り下げていただいた。それが第二部「まちを語る——建築家へ」である。まちと取り組む建築のこれからの考えるにあたり、手引きとなることを意図している。そして、それ自身が討論の延長戦ともなっている。もとより統一を目指していない。生の現状を紹介したいと思う。

これから一層進むであろう、建築の「まちへの取り組み」がどのように展開するか、誠に興味深い。二十年、三十年先から今日を振り返り、その変化が望ましいものになり得たとすれば、その過程に参加できることは幸せだ。この本がそうした道を志す方々を勇気づけるものであることを祈りたい。日本建築家協会（JIA）の願いである。

JIA『建築家の本まちへ』編集チーム代表
建築家大会テーマプログラム・コーディネーター

柴田 知彦